

奇妙な話

—— 谷川道雄著

『戦後日本から現代中国へ』を読んで

牧野 剛 (現代文科)

この書評を、奇妙な話から始める愚行をお許しいただきたい。ラフカディオ・ハーン (小泉八雲) に「日本人の微笑」という、小品の随筆がある。そこにおおよそ次のような内容が書かれる。

<在日外国公館に勤める勤勉な日本人の下男が、ある日突然何の連絡もなく消える。数日後にやっと仕事に帰ってきた彼は、外国人の上司に、母が亡くなったので急いで故郷に帰った、という経緯を微笑みながら話す。その上司は、真面目な男が仕事を無断で休んで急遽帰らねばならないほど、彼にとって母親の死が深い悲しみであったならば、なぜ自分に微笑ながらそのことを話したのかが分からない、というのである。しかし、私 (ハーン) にはその意味がわかる…。>

ここで、ハーンに何がどのようにわかっていたかは、今は問わない。このことをふいに思い出したのは、谷川道雄氏の最新の著書『戦後日本から現代中国へ』(河合ブックレット)で、その谷川氏の共同体論の構造とその成立についての極めて詳細な、敢えて言えば正確かつ用意周到な解説を書いた山田伸吾氏の、「(谷川氏の「共同体論」の対抗原理であった)「唯物史観」という磁極の弱まりはそれと引きあうことで釣り合いを取っていた「共同体論」自体の磁極をも弱める結果となった…」というたった一点の内容が私の心に引っかかったからである。そして、逆に多くの歴史家の中で、なぜ谷川氏だけが歴史家として現実の中国や日本にかくも切実に関わり、その社会と政治を真剣に分析し、提言しようとしているのかがわかった気がしたからである。

洋の東西を問わず、戦後、歴史を考える者にとっては、いわゆる歴史学の主流であったマルクス主義的な唯物史観(史的唯物論)をどう考えるのかということが、唯一ではないとしても一等の問題であった。しかも、中国史だけでなく現代社会主義中国をも視野に入れて考える者にとっては、そして何よりも中国を愛する者にとっては、その問いは不可欠な問いとして存在したはずである。そしてその問題は、60～70年代に私たちが軽薄にも「論じた」、<西洋近代主義の変形としての史的唯物論>の問題でも、或いは<西洋近代の限界を超えるものとしての史的唯物論>の問題でもなく、ましてや実証主義とマルクス主義の単純な折衷論や、さらには唯物史観への対抗軸としてのやむをえない結論としての<共

同体史観>という問題でも、なかったはずである。私も70年ごろに、谷川氏の共同体論を、一種の疎外された「共同体」が自己の理想の像を復活させるという、単純な「疎外革命論」としての「共同体論」だと思い込んでしまった一人であった。もしもそんな単純な構造のものであったならば、そこから現実問題へ谷川氏が踏み出すことはとてもできなかつたろうし、ことは単なるアカデミズム内部の論争と大学という聖域での地位上昇戦にとどまればはずである。ハーンの言う「私には…わかる」になることは、なかつたろう。

今回、中国や日本の現実の中から谷川氏が紡ぎ出した一連の議論の基本構造は、先の奇妙な話と類似の構造をしているのではないかと思えるのである。つまり、その第一は、ハーンが言った「私には…わかる」が日本の現実を指していたのと同じように、谷川氏の場合には、その「私には…わかる」の先に中国の歴史や現実が確かに存在しており、机上の空論のことではないこと。そして第二に、かつて日本には、「表面で笑いながら心で泣いている」という、<笑い/泣き>の二極の対立を越えた、第三者にさえ「もらい泣き」を引き起こす強い表現方法があり、それは江戸文明の中、特に歌舞伎や人形浄瑠璃の中で磨かれて多くの民衆の共感を獲得した事実があった。その関係の中では、第三者も純粋には「客観的」ではありえないのである。そしてこの表現こそが、わが国での<一番の強い悲しみ>の表現であり、<笑い/泣き>の二極をはるかに越える「鋭い表現」であったのである。今度の著書の中で、谷川氏はこのことに近い構造・内容をもって、<共同体論/史的唯物論>の対立する論争に、彼流の一つの結論をつけようとしたといえるのではないか。つまり、「客観的」に眺めているだけではすまない現実への切実な問題関心に自身が切り込むことを通して、当然にも一番鋭くその対立を止揚し得たのではないか。

谷川氏が、もし私の考えていることに近い発想の基に、今回のブックレットを著わしているとしたら、戦後の騒乱とマルクス主義史学の推移、そして現代日本と中国への強い関心、若者へのメッセージ等の意味が(山田氏の解説では特に後二者への評が避けられているが)、そしてその目標とされているものが、今回間違いなくより鮮明なものとなったと言えるであろう。後進は、中国史をここから始めることができる分その礎石を手に入れたことになる。

同時に、かつて、高校時代、谷川氏の兄谷川雁の著作に、反中心、反主流の意識を強く感じさまざまに触発された私は、今、その中に流れていた土着性、非東京・非中央主義が、弟道雄氏の論と同じく、外見以上に実はそれほど単純なもの(単なる対立論的なもの)ではなかつたのではないかということをも感じ、反省し、思い起こすのである。そしてそのことが孕む内容こそが私自身と谷川氏との、強い因果や関係そのものでもあり、その証でもあるのだ、と考えるのである…。